

## 二 東南アジア課程の成立

### 東京外国語学校の時代

次に年代を追って東南アジア課程成立までの変遷をたどってみる。

▽一九〇八（明治四十二）年 東京外国語学校 東洋語速成科馬來語学科

東京外国語学校規則 第一条「本校ハ外国語ニ熟達シ実務ニ適スヘキ者ヲ養成スル目的ヲ以テ歐洲及ビ東洋ノ近世語ヲ教授スル所トス」。

東洋語速成科の開設。馬來語、ヒンドスタニー語、タミル語、蒙古語の各学科が置かれる。こうして、現在の東南アジア課程八専攻語の中ではインドネシア語・マレーシア語が最も古く、一九〇八年以来の歴史をもつことになる。この修業年限一年の馬來語学科は、廃止されるまでの三年間に二二名の卒業生を送り出した。

▽一九一一年（明治四十四）年 馬來語科の本科昇格、暹羅語科の新設

三月をもって東洋語速成科廃止。蒙古語、馬來語、ヒンドスタニー語、タミル語の四学科の本科昇格。暹羅語科が新設される。タイ語のスタートである。暹羅語科、馬來語科が修業年限三年の本科として並ぶことになった。当時の学科目は次のようなものであった。

## 二 東南アジア課程の成立

各学年共通 修身(一)、國語漢文(二)、体操(三)。(一)内は週時間数。

第一学年 正科語学(六)、英語(二六)、言語学(二)又は法学通論(二)。計二九又は三〇。

第二学年 正科語学(一四)、英語(六)、言語学(二)又は経済学(三)。計三〇又は三一。

第三学年 正科語学(一四)、英語(六)、國際法(二)又は教育学(三)。計三一。

馬來語学科の場合、英語(六)の代わりに蘭語(六)を選択することが出来たので、マレー方面に活躍の場を求めようという者は馬來語プラス英語のコースを、ジャワに雄飛しようという者は馬來語プラス蘭語の組み合わせを選んだであろう。

▽一九一四(大正三)年 暹羅語科、馬來語科の本科一期生の卒業

暹羅語科四名、馬來語科一〇名の本科一期生が卒業。馬來語科はこれ以降継続的に卒業生を出す、他方、暹羅語科は一九一六(大正五)年に二期生を送り出した後、なぜか長い空白期に入る。この学科が次に卒業生を出すのは、一九四四(昭和十九)年なのである。この間、学生募集を行っていないということになる。

▽一九一九(大正八)年 語科を語部に改称

東京外国語学校学則 第一条「本校ハ外国語ニ熟達シ実務ニ適スヘキ者ヲ養成スル目的ヲ以テ現代諸語ヲ教授スル所トス」。

語科の名称が改められ、語部となる。また「……各部ヲ分チテ文科、貿易科、拓殖科トス但シ部ニヨリテハ或科ヲ設ケサルコトアルヘシ」ということで、馬來語部は貿易科、拓殖科のみ、文科は設けられなかった。学科目は次の通

り。学校規則第一条に「実務ニ適スヘキ者ヲ養成スル」とうたう通りのカリキュラムと言うより、まるで南方雄飛の馬來語部お誂え向きのカリキュラム、という感がある。

貿易科

各学年共通 体操教練 (二)。

第一年 修身(実践道徳 一)、外国語(当該国語当該国情 一二三)、国語(二)、商業実務(商業算術 二)、法律(法学通論 二)。

第二年 修身(倫理 一)、外国語(当該国語当該国情 一二二)、国語(二)、経済(経済通論 二)、商業(商業通論 二)、法学(民法 一)。

第三年 修身(倫理、日本道徳の特質 一)、外国語(当該国語当該国情 一四)、商業(外国貿易外国為替、海上保険及海運、商業政策 三)、商業実務(簿記、タイプライティング、実地見学 三)、貿易実務(商業地理、商品分布、商品経済 三)、法律(民法 三、商法 三、国際法 三)。

計 各学年 三二。

拓殖科

貿易科と相違する点は、商業実務や商業にかわる以下の学科目、及び第三年の法律が国際法(一)だけであること。

第一年 農業(農学大意 二)。

第二年 農学(林学大意 二、水産学大意 一)。

第三年 農学(畜産学大意、鉱山学大意、農業経済 五)、測量及土木(土木大意、測量実習 二)、植民衛生(熱帯衛生、寒帯衛生 一)、植民政策(植民史植民政策 二)、植民地事情(商業地理、物産交通等 三)。

## 二 東南アジア課程の成立

計 各学年 三二。

馬來語部では蘭語、英語のいずれかを選修するとなっている。

▽一九二七（昭和二）年 四年制になる

東京外国語学校学則 第一条「本校ハ外国語ニ熟達シ実務ニ適スヘキ者ヲ養成スル目的ヲ以テ現代諸語及ビ其ノ他ノ学科目ヲ教授スル所トス」。この第一条は変わっていないが、「修業年限ハ四年トス」（学則第四条）。三年制から四年制に変わる。馬來語部で馬來語プラス英語を選じたものは、更に第二外国語の名で蘭語を履修した。

▽一九四〇（昭和十五）年 毎年募集を開始 暹羅語部の学生募集

一九一一（明治四十四）年からほぼ隔年であった学生募集がこの年から毎年になる。同時に、暹羅語部が学生募集を再開。こうして、一九一六（大正五）年の二期生卒業以来の長い空白に終止符を打って、現在で言うタイ語専攻の卒業生が一九四四（昭和十九）年以降継続的に出るようになった。

▽一九四一（昭和十六）年 暹羅語部を泰語部と改称

暹羅が泰に改められ、暹羅語部が泰語部となる。

東京外事専門学校の時代

▽一九四四（昭和十九）年 東京外事専門学校（修業年限三年）

学則第一条「本校ハ専門学校令ニ依リ皇国ノ道ニ則リテ海外諸民族ノ諸事情及ビ其ノ言語ニ関スル高等ノ教育ヲ施シ国家有用ノ人物ヲ錬成スルヲ以テ目的トスル」。

東京外国語学校以来のタイ科（定員二〇名）、マライ科（二〇名）に加えて、新たにビルマ科、フィリピン科が置かれた。但し、ビルマ科、フィリピン科は学生募集を行っていない。

▽一九四五（昭和二十）年 フィリピン科の学生募集

「昭和二十年度 東京外事専門学校入学志願者心得」には「本校ハ海外諸民族ノ諸事情及ビ其ノ言語ニ関スル科目ヲ教授スル所トス」とある。

タイ科三〇名、マライ科三〇名、フィリピン科二〇名を募集するも、初年度に続いてビルマ科の募集はなし。

▽一九四六（昭和二十一）年 マライ科をインドネシヤ科と改称

マライ科をインドネシヤ科、フィリピン科をフィリピン科と改称。

▽一九四八（昭和二十三）年 フィリピン科の一期生卒業

この東京外事専門学校フィリピン科はこの年から卒業生を送り出すが、翌一九四九（昭和二十四）年に東京外事専門学校は新制大学東京外国語大学となり、ビルマ科と共に廃止の憂き目を見る。

こうして、後輩を持たぬ嘆きをかこつ身となった東京外事専門学校フィリピン科四期四八名の卒業生が、一九九二（平成四）年のフィリピン語復活、そして一九九六（平成八）年卒業の若い後輩の登場をどんなに歓喜して迎えたか、想像に難くない。

### 東京外国語大学の時代

▽一九四九（昭和二十四）年 東京外国語大学 インドネシヤ学科、シヤム学科

学則第一条「本学は、外国語大学基準に従い、外国の言語とそれを基底とする文化一般につき、理論と実践にわたり研究教授し、国際的な活動をするために必要な高い教養を与え、言語を通して外国に関する理解を深めることを目的とする」。この学則第一条は、「外国語大学基準に従い」を削除したかたちで現在も行われている。

第三条に「本学に次の学科を置く」とあり、インドネシヤ学科、シヤム学科が置かれ、外事専門学校時代のフィリピン科、ビルマ科は廃止。ビルマ科は一度も学生募集を行わないままの廃止となった。ビルマ語の再スタートは一九八一（昭和五十六）年まで待つことになる。

外国語学部のみ単科大学なのだが、そういう事情から学内でこの「外国語学部」を意識することは、ながらくなかったと言っているだろう。学則第三条も「本学に次の学科を置く」だし、卒業証書にこれが用いられるのは、現存もつとも新しい卒業証書（卒業証書と学位記とが併記されている形式のもの）の「本学外国語学部〇〇語学科所定の課程を修めて」においてであって、それ以前のものには「外国語学部」の名を使わず、「本学所定の課程を修了し」、「本学インドネシヤ語学科所定の課程を修了し」である。

専攻科目は、インドネシヤ学科でマライ語と蘭語の初級・上級・普通講義・演習及び講読・特殊講義、英語演習及

び講読、卒業論文。シヤム学科でシヤム語の初級・上級・普通講義・演習及び講読・特殊講義、英語演習及び講読、卒業論文である。

▽一九五一（昭和二十六）年 第七部第二類、第三類

インドネシヤ学科、シヤム学科は、第七部（東南アジア圏）第二類（専攻語マライ語・オランダ語）、第三類（専攻語シヤム語）となる。この部類制は一九六一（昭和三十六）年まで行われた。この部類制では「各類にそれぞれ講座を置く」となっていた。

こうして、第七部第二類には「インドネシヤ学講座」が置かれ、その科目としてマライ語又は蘭語の初級・上級・普通講義・特殊講義、共通講義、演習及講読、卒業論文があり、第七部第三類には「シヤム学講座」があつて、その下にシヤム語の初級・上級、普通講義、特殊講義、共通講義、演習及講読、卒業論文が置かれた。

▽一九六一（昭和三十六）年 インドネシア科、タイ科

第七部第二類はインドネシア科、第七部第三類はタイ科となる。科目は、マライおよびオランダ語学、マライおよびオランダ文学、インドネシアおよびオランダ事情（以上インドネシア科）、タイ語学、タイ文学、タイ事情（以上タイ科）である。

▽一九六四（昭和三十九）年 インドネシア語学科、インドシナ語学科

インドネシア科はインドネシア語学科、タイ科は「ベトナム語学文学」を加えてインドシナ語学科となる。学生の

## 二 東南アジア課程の成立

増員はなく、定員は従前通り二〇名。学生は入学後タイ語とベトナム語のいずれかを選んで履修した。

学則は、第二条「本学に外国語学部を置く」、第三条「本学に外国語専攻科を置く」。専攻科の開設に伴って初めて外国語学部を唱える必要が生じたもの。学科目が次のように整理される。

インドネシア語学科：インドネシア語学文学（専攻語名マライ語がインドネシア語に変わる）、オランダ語学文学（前期必修科目たることを止めて後期での必修となる）、インドネシア事情。

インドシナ語学科：タイ語学文学、ベトナム語学文学、インドシナ事情。

▽一九六六（昭和四十二）年 大学院の開設

第三条は「本学に大学院を置く」となる。インドネシア語学科には、インドネシア語学文学講座、オランダ語学文学講座、インドネシア事情講座。インドシナ語学科には、タイ語学文学講座、ベトナム語学文学講座、インドシナ事情講座が置かれる。

▽一九六八（昭和四十三）年 大学紛争 バリケード封鎖

十月、全共闘によるキャンパス・バリケード封鎖。キャンパスに入れないまま、教授会は湯島聖堂や巣鴨地蔵通りの成光苑など学外を転々とする。

▽一九六九（昭和四十四）年 三月封鎖解除



三月、機動隊による封鎖解除。卒業は六月となる。

▽一九八一（昭和五十六）年 ビルマ語の再スタート

インドシナ語学科に「ビルマ語学文学」が加わり、インドシナ語学科は学生定員一〇名を加えた三〇名となる。一九四四（昭和十九）年、東京外事専門学校に開設され学生募集を行わないまま廃止となったビルマ語の再スタートである。学生の募集は従前通りインドシナ語学科として行い、入学後各自がタイ語、ベトナム語、ビルマ語のいずれかを選んで履修した。

▽一九八四（昭和五十九）年 インドネシア・マレーシア語学科

インドネシア語学科が「マレーシア語学文学」を加えて、インドネシア・マレーシア語学科（定員三〇名）となる。この増員分一〇名を募集定員として、小論文及び面接の二次募集を実施したが、志願者数三四二名、三四倍の競争率を記録。この二次募集は大成であった。

▽一九八五（昭和六十）年 二次募集

ポルトガル語学科、インドネシア・マレーシア語学科、インドシナ語学科がそれぞれ募集定員一〇名の二次募集を実施した。

▽一九八六（昭和六十二）年 臨時増募

## 二 東南アジア課程の成立

十八歳人口の増大に対処する臨時増募の開始。それにより、インドネシア・マレーシア語学科の学生定員はプラス五名で三五名、インドシナ語学科の定員はプラス一五名で四五名となる。インドシナ語学科は、募集定員タイ語五名、ベトナム語五名、ビルマ語五名とする二次募集を実施した。

▽一九八七（昭和六十二）年 タイ語・ベトナム語・ビルマ語としての学生募集

インドシナ語科は伝統的に語科として学生を一括募集し、入学後にタイ、ベトナム、ビルマのいずれかを選択させる方式で来ていたが、この年初めてタイ語一五名、ベトナム語一五名、ビルマ語一五名を募集定員とする入試を行った。

▽一九九二（平成四）年 東南アジア語学科 ラオス語・カンボジア語の新設とフィリピン語の復活

インドネシア・マレーシア語学科とインドシナ語学科が合併。既存のインドネシア語、マレーシア語、タイ語、ベトナム語、ビルマ語に、新たにフィリピン語、ラオス語、カンボジア語を加えた八専攻語を擁する東南アジア語学科となる。現在の東南アジア課程の体制がこれで成立。ラオス語、カンボジア語は文字通りの新設だが、フィリピン語は一九四九（昭和二十四）年新制大学発足時の廃止以来の復活である。

講座編成も、これまでのインドネシア語学文学、マレーシア語学文学、インドネシア・マレーシア事情、オランダ語学文学（以上、旧インドネシア・マレーシア語学科）、タイ語学文学、ベトナム語学文学、ビルマ語学文学、インドシナ事情（以上、旧インドシナ語学科）から面目一新して、東南アジア語学、東南アジア文学、東南アジア事情の三講座となる。学生募集は、インドネシア・マレーシア・フィリピン五〇名、タイ・カンボジア三〇名、ベトナム・

ラオス二五名、ビルマー一五名で実施した。

▽一九九三（平成五）年

学生募集はインドネシア語二〇名、マレーシア語一五名、フィリピン語一五名、タイ・カンボジア語三〇名、ベトナム・ラオス語二五名、ビルマ語一五名というかたちで実施した。

▽一九九四（平成六）年

この年は、インドネシア語二〇名、マレーシア語一五名、フィリピン語一五名、タイ・ラオス語三〇名、ベトナム・カンボジア語二五名、ビルマ語一五名を募集した。

### 東南アジア課程の成立

▽一九九五（平成七）年 東南アジア課程のスタート

外国語学部の七課程三大講座（言語・情報講座、総合文化講座、地域・国際講座）への改組に伴い、東南アジア語学科は、東南アジア課程となる。学生募集は九四年と同じく、インドネシア語二〇名、マレーシア語一五名、フィリピン語一五名、タイ・ラオス語三〇名、ベトナム・カンボジア語二五名、ビルマ語一五名。

▽一九九八（平成十）年 臨時増募返還計画

翌年度に計画されている臨時増募返還（二〇名）に伴い、東南アジア課程の学生定員は二二〇名から一〇〇名とな

る。同時に、インドネシア語の定員を二名減、ベトナム語の定員を二名増とする課程内での定員調整も行い、インドネシア語一八名、マレーシア語一〇名、フィリピン語一五名、タイ語一五名、ラオス語一〇名、ベトナム語一二名、カンボジア語一〇名、ビルマ語一〇名、とする予定である。

### 三 卒業者および教官

#### 一 東南アジア課程卒業者数一覧

次に東南アジア課程卒業者数一覧を掲げる。「東京外国語大学同窓会名簿」(一九九四年版、東京外語会)とその後の卒業生名簿に基づいて作成した。

#### インドネシア語専攻

日露戦争(一九〇四—〇五年)から三年目、一九〇八(明治四十一年)年、東京外国語学校東洋語速成科馬來語学科が開設される。これによって、インドネシア語・マレーシア語が東南アジア課程の中では最も長い歴史を持つこととなる。この速成科は廃止されるまでの三年間に二二名の卒業生を送り出した。一九一一(明治四十四)年、馬來語科は本科に昇格する。日韓併合の翌年である。

速成科馬來語学科以来の専任教官は以下の通りである。

村上直次郎(一九一一—一八、東京外国語学校校長 一九〇八—一八)、藤田季荘(一九〇八—〇九)、佐和山彌六(一九一六—一八)、上原訓蔵(一九一九—二四)、朝倉純孝(一九一九—五三、名誉教授)、高田成義(一九二〇)、